

# 大学生の就職活動におけるつまずきの分析 I

佐野 友泰<sup>1</sup>

## 要 旨

筆者は、大学生の就職活動における「つまずき」に着目し、「つまずき」とそれに対応した支援ニーズを探り、適切な支援方法を模索することは、大学における教育的な側面と、予防的心理臨床活動という意味が存在すると考える。そこで本研究では、学生の就職活動における「つまずき」の心理的プロセスを検討し、それに応じた援助ニーズを明らかにすることを目的とした。

調査協力者は大学学部学生27名であり、就職活動中および就職活動を終えた大学4年生に対し、掲示及び学内のポータルシステムにより、調査協力者を募集した。応募してくれた調査協力者に対し、半構造化面接を行った。

質的分析の結果、つまずきのきっかけとなる出来事について、「面接場面での緊張」と「周囲からの影響や準備の困難さ」の対比とその循環関係、出来事から生ずる感情について、将来に目を向けすぎることの危険性および「不安や喚起」と「撤退」という異なるレベルの動機づけの問題が明らかになった。さらに、希望する支援について、指導的・共感的役割、情報の希求と不安増大という循環が指摘された。

キーワード：大学生，就職活動，つまずき

## 1. 従来の研究と本研究の目的

就職活動に関する近年の研究について、松田（2014）は、調査協力者の「企業説明会・セミナーへの参加」「エントリーシートの提出」「筆記試験の受験」「面接試験の受験」の量から「活動活発群」、「低活動量群」、「活動遅延群」という3類型を見出し、就職活動不安、Big Five、コーピングという観点から、各群の比較を行った。その結果、「活動活発群」は他2群と比較して、外向的なパーソナリティ特性を持ち、また問題焦点型・情動焦点型といった、積極的対処をとっている可能性を見出した。また、上田・猪原（2017）は、体験の回避傾向が、就職活動不安と就職活動の関係に及ぼす影響に焦点を当て、体験の回避傾向が低い場合は、就職活動不安の大小にかかわらず、より多くの進路探索行動（内定を得るための実際の活動）を行うのに対して、体験の回避傾向が高い場合は、就職活動不安の高さが進路探索行動を促進していたことを示した。そして、

就職活動不安は就職に関する情報探索行動の促進や内定との正の関連を示す一方で、就職活動に対する満足度には直接貢献せず、また、就職活動の長期化につながることを明らかにした。

さらに、軽部他（2018）は、大学生の就職活動の遂行に影響を与える不安の機能的側面を、セルフ・コントロールおよび体験の回避傾向という認知行動的要因の個人差、さらに就職活動の時期という要因から検討した。その結果、長期的な結果を見て行動することが可能な「改良型SC」は、大学3年生、大学4年生ともに、情報収集行動および進路探索行動を促進していたことを示した。そして、王・黄（2011）は就職不安と情動知能や就業動機との関連性に着目し、情動知能のうち自己対応の側面と就職不安の職業適性不安との間に負の相関を報告した。

これらの研究では、就職不安が就職活動の諸要因と関連があると指摘されており、これらの指摘の重要性は疑う余地のないものであると考える。

これらの研究とは別の視点より、増淵（2019）は、

<sup>1</sup> 札幌学院大学 心理学部。

文献研究より、自己と職業の理解・統合、就職活動の振り返りといった思考的活動が自己成長につながることを示し、振り返りなどの思考的活動の量や質により、成長・発達の度合いや、成長感の実感が変わる可能性もあると指摘したうえで、就職活動における振り返りなどの思考的活動の詳細の検討を課題として示している。この鶴田の指摘は、就職活動において学生が経験する内的体験の重要性を指摘するものであると考える。

実際の就職活動の現場では、自分の希望する就職先に、何の障害もなく内定を得る学生は稀であると考えられる。学生は就職試験で様々な困難さを感じ、そこから思考を繰り返す、さらには「このような援助があれば」と考えつつ活動を続けていくものであると考える。これらの学生の内的体験を詳細に検討することは、個の体験を重視する心理臨床的アプローチにも有効であると考えられる。

ここに、筆者は就職活動における「つまずき」に着目する意義を見出した。ここでいう「つまずき」とは、学生が就職活動の場面で感じる様々な困難さを示すものとする。

この就職活動において学生が「つまずき」を感じていることは、筆者が教員として就職指導に関与していても、実体験として感じるものである。しかしながら、就職活動において、学生が直接体験している「つまずき」に焦点を当てた研究は少なく、筆者が見出した限りでは、政本（2011）が就職面接不合格場面を想定して、反実仮想の特徴を実験的に検討した報告や、松本（2012）が学生の就職活動体験記より、失敗体験の原因帰属を検討した報告のみである。

そしてこの「つまずき」とそれに対応した支援ニーズを探り、適切な支援方法を模索することは、大学における教育的な側面と、予防的心理臨床活動という意味が存在すると考える。そこで本研究では、学生の就職活動における「つまずき」、そこから生じる思考、援助ニーズを質的に検討し、学生が感じている具体的な内容を検討することを目的とする。これは、従来の就職活動に関する諸研究が質問紙調査に基づくものが多かったが、上述の様に学生が直接体験している「つまずき」に焦点を当てた研究が少ないため、インタビューを通じて、詳細な質的研究を行うことが、「つまずき」と支援ニーズに関する概念をより包括的に捉えられると考えたためである。

## 2. 本研究の教育現場への還元可能性

### 2.1 就職活動を目前とした学生への「つまずき」に対する心構え

本研究を推進することで、就職活動を行う学生が陥りやすい「つまずき」とその心理プロセスがある程度パターン化できる。つまり、就職活動において、学生が体験しやすい「つまずき」とその際に学生がどのようなことを感じ、落ち込んだり、やる気をなくしたりするのかを予測することが可能となる。このようなパターンについて、就職活動をこれから体験する学生に整理して伝えることができれば、実際に就職活動を始めた際に体験する、「つまずき」への準備ができ、実際に体験した際の心理的負荷が軽減されると予測される。

### 2.2 具体的な就職支援策考案のための基礎資料提示

本研究を推進することで、「つまずき」とその心理プロセス、支援ニーズの関連性が検討できれば、どのようなつまずきに対して、学生がどのような支援ニーズを持ちやすいのかが明確になり、具体的な就職支援策を考案・実施する際の基礎資料となると考えられる。

## 3. 方法

### 3.1 調査協力者

私立大学学部学生27名（男性12名、女性15名、平均年齢21.22, SD0.42）

### 3.2 手続き

就職活動中および就職活動を終えた大学4年生に対し、掲示及び学内のポータルシステムにより、調査協力者を募集した。応募してくれた調査協力者に対し、半構造化面接を行った。なお、実際の面接は面接のプロセスに関して、筆者の作成した面接マニュアルに従ったトレーニングを受け、かつ守秘義務を有する研究協力者の協力を得て実施した。

面接内容は、a.就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事、b.その出来事に接した際の感じや考え、c.希望する支援とした。

また、本面接はプライバシーの保たれる小教室にて個別にて行った。調査協力者に対して口頭と文書にて調査意図およびICレコーダーにて録音をすることを説明し、同意が得られた場合に同意書への記入を求めた。謝礼としては図書カードを渡すものとした。

なお、本研究は札幌学院大学大学院臨床心理学研究科研究倫理審査委員会において、研究倫理に関する承認を受けた（申請番号：臨1303，承認日：2013年5月9日）。

## 4. 結果

### 4.1 分析

得られた面接データは逐語化し、葛西（2008）のKH法（関連性評定質的分析）に準じた分析を行った。本研究では、得られた逐語から筆者が、a. 就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事、b. その出来事に接した際の感じや考え、c. 希望する支援に該当する箇所を抽出し、a-c それぞれについて、類似したものをまとめてラベル付けを行った。

ラベル付けを行う際には、逐語データの本質を失わぬよう、抽象度を高めぬよう留意している。その後、各ラベルについて「あり」「なし」にて数量化し、数量化3類を行うことで、軸を見出し、ラベルを空間的に位置付けた。

得られたデータをできるだけデータの質を抽象化することなく、概念を結晶化するものである。

### 4.2 結果

#### 4.2.1 ラベル付けされたカテゴリについて

先述のように、逐語データから対象部分を抜き出し、類似したものについて、抽象度を上げずにまとめてラベル付けを行うという作業を行ったところ、以下の通りとなった。

a. 就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事については、「AL2-1面接やグループディスカッションで緊張してうまく話せない」、「AL2-2面接で予想外の質問や相手が興味のない態

度」、「AL2-3自分のやりたい仕事や受けたい企業がなかったり自分に合わない気がする」、「AL2-4良かったと思っていたのに落とされて、自分を否定されたり何がいけないのかと思う」、「AL2-5友人の内定や情報で不安になったり分らなくなる」、「AL2-6面接や書類作成で自己アピールができなくて大変」という6つのカテゴリが結晶化された。

また、b. その出来事に接した際の感じや考えについては、「BL2-1面接・集団面接・グループディスカッションの失敗経験を通じて、外に出たくなくなり、やる気がうせ、就職情報を見たくなくなった」、「BL2-2まわりの様子を見て、決まらなかったらという不安や焦り」、「BL2-3自分自身が見えて、頑張ろうと思った」の3カテゴリが、さらにc. 希望する支援については、「CL2-1就職活動中の学生の集まれる場や精神的なケアを用意してほしい」、「CL2-2個人に応じた面接やグループディスカッションの練習・指導をしてほしい」、「CL2-3キャリア支援課職員との距離を縮め、厳しい指導や突っ込んだ助言がほしい」、「CL2-4キャリア支援課にメールでの添削・相談時間・期間の延長・人手を増やしてほしい」、「CL2-5低い学年から就職活動の具体例・地域別／男性向け女性向け／業種情報・体験談などを示してほしい」の5カテゴリがそれぞれ結晶化された。

#### 4.2.2 各質問項目における数量化 III 類

a-c の各質問項目について、上述したカテゴリを「あり」「なし」とカウントし、数量化 III 類を行った。各分析における軸の固有値及び寄与率を表1に示した。軸の採用数については、因子分析と同様、固有値が急激に落ち込んでいる、あるいは算出された軸が解釈可能な場合は可能な限りの軸数を採用した。各質問項目に対する数量化 III 類の結果を図1～4に示した。

表1 各質問項目における軸の固有値及び寄与率

	a. 就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事	b. その出来事に接した際の感じや考え	c. 希望する支援
第1軸	0.76(0.29)	0.38(0.57)	0.55(0.34)
第2軸	0.60(0.23)	0.29(0.43)	0.44(0.28)
第3軸	0.55(0.21)	—	0.34(0.21)
第4軸	0.42(0.16)	—	0.27(0.17)
第5軸	0.26(0.10)	—	—

( ) は寄与率を示す。

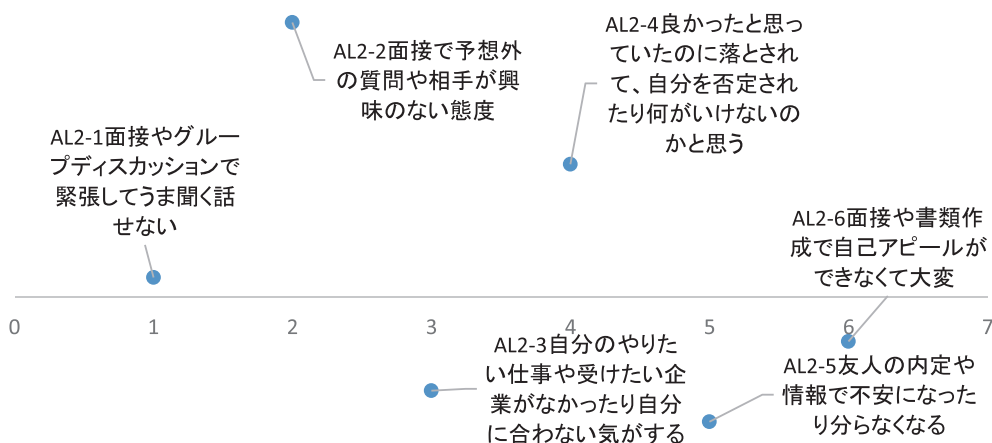


図1 就職活動における「つまずき」を感じる出来事に関する数量化 III 類結果 (第1軸: 横軸)

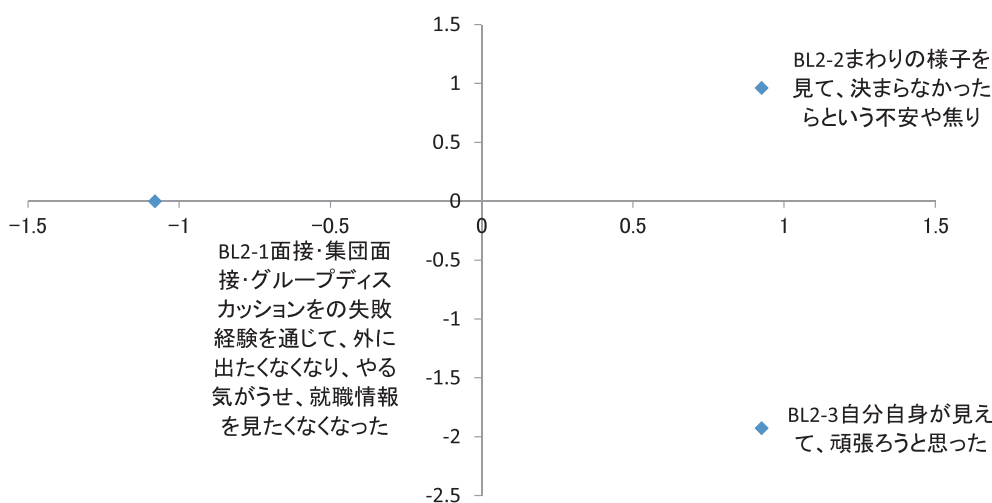


図2 出来事に接した際の思考や感情に関する数量化 III 類結果 (第1軸: 縦軸, 第2軸: 横軸)

a. 就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事に関する数量化3類では、第1軸のみが抽出された。この軸では、「AL2-1面接やグループディスカッションで緊張してうまく話せない」と「AL2-5友人の内定や情報で不安になったり分らなくなる」、「AL2-6面接や書類作成で自己アピールができなくて大変」が軸上の両端に位置しているため、「面接場面での緊張」と「周囲からの影響や準備の困難さ」が対比構造をなしていると言えよう。

b. その出来事に接した際の感じや考えに関する分析では、第1軸、第2軸という2つの軸が抽出された。第1軸は「BL2-2まわりの様子を見て、決まらなかったらという不安や焦り」と「BL2-3自分自身が見えて、頑張ろうと思った」が距離を保っているため、「周囲の観察によるネガティブな感覚」と「自己内部から生じるポジティブな感覚」という対比が認められよう。ま

た、第2軸は「BL2-2まわりの様子を見て、決まらなかったらという不安や焦り」、「BL2-3自分自身が見えて、頑張ろうと思った」および「BL2-1面接・集団面接・グループディスカッションの失敗経験を通じて、外に出たくなくなり、やる気がうせ、就職情報を見たくなくなった」が軸上で遠距離にあるため、「まわりや自分自身から生じる不安や奮起」と「失敗体験から生じる撤退」という対比が考えられる。

c. 希望する支援については1-4の4軸が抽出された。第1軸は「CL2-1就職活動中の学生の集まれる場や精神的なケアを用意してほしい」、「CL2-2個人に応じた面接やグループディスカッションの練習・指導をしてほしい」および「CL2-4キャリア支援課にメールでの添削・相談時間・期間の延長・人手を増やしてほしい」が軸上で離れた距離にあるため、「学生個人への要望」対「組織への要望」の対比が考えられる。



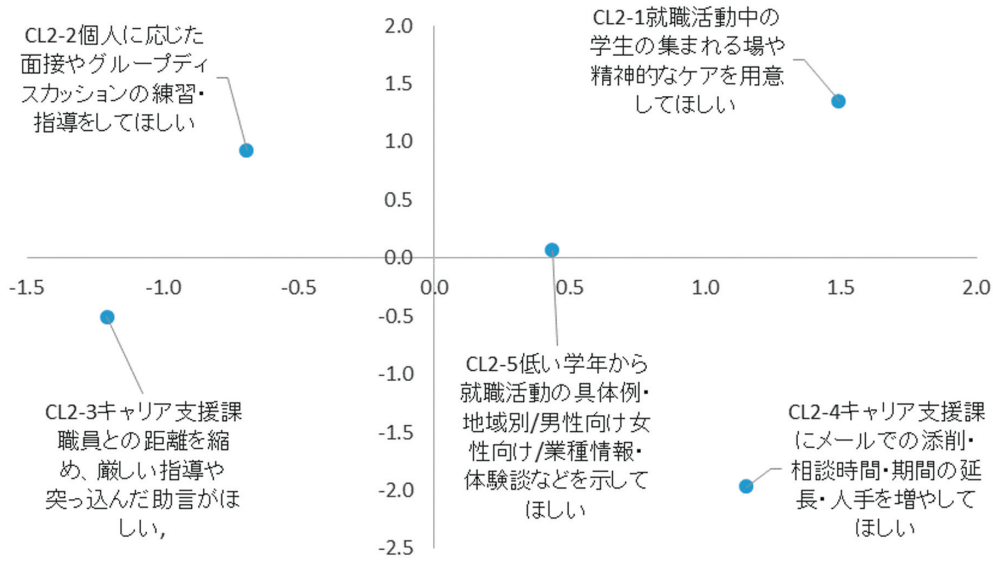


図3 希望する援助に関する数量化Ⅲ類結果 (第1軸：縦軸, 第2軸：横軸)

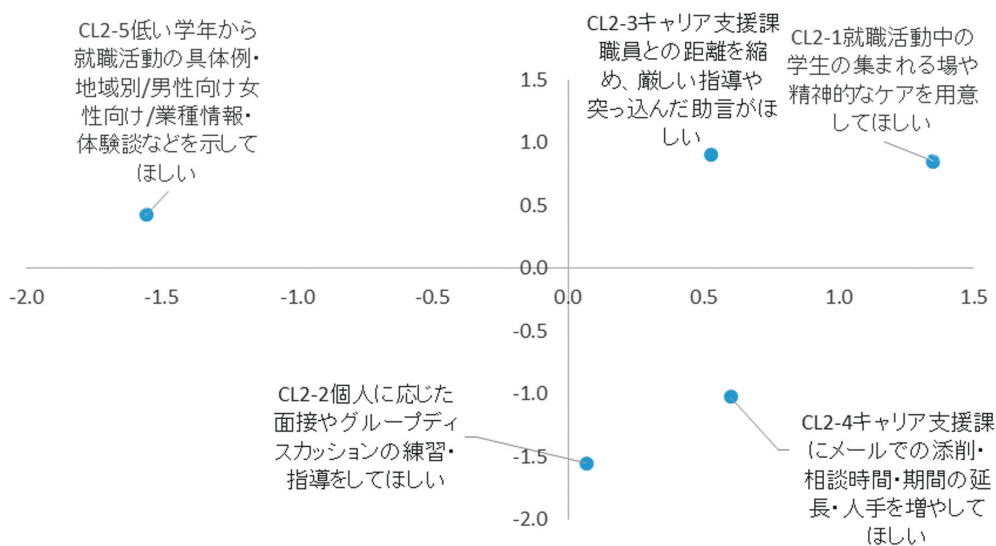


図4 希望する援助に関する数量化Ⅲ類結果 (第3軸：縦軸, 第4軸：横軸)

第2軸は「CL2-2個人に応じた面接やグループディスカッションの練習・指導をしてほしい」、「CL2-3キャリア支援課職員との距離を縮め、厳しい指導や突っ込んだ助言がほしい」および「CL2-1就職活動中の学生の集まれる場や精神的なケアを用意してほしい」、  
「CL2-4キャリア支援課にメールでの添削・相談時間・期間の延長・人手を増やしてほしい」が軸上で遠距離を保っているため「指導のリクエスト」対「精神的ケア・人的資源のリクエスト」という対比が考えられる。

また、第3軸は、「CL2-1就職活動中の学生の集まれる場や精神的なケアを用意してほしい」、「CL2-3キャリア

支援課職員との距離を縮め、厳しい指導や突っ込んだ助言がほしい」および「CL2-2個人に応じた面接やグループディスカッションの練習・指導をしてほしい」が軸上で遠距離にあるため、「仲間・支援者への要望」対「学生個人への要望」という対比が、第4軸は「CL2-1就職活動中の学生の集まれる場や精神的なケアを用意してほしい」および「CL2-5低い学年から就職活動の具体例・地域別/男性向け女性向け/業種情報・体験談などを示してほしい」が軸上で遠い距離にあるため、「学生自身の精神的安定」対「情報提供」という対比が想定できよう。

## 5. 考察

### 5.1 就職活動において「つまずき」を感じるきっかけとなった出来事について

本結果では、具体的な「つまずき」の内容のうち、「面接場面での緊張」と「周囲からの影響や準備の困難さ」が対比構造として示された。尾上(2010)は、「女子大生は就職活動の結果は努力に帰属する考えが高い一方で、実際の活動には能力に帰属していること」を示唆している。

つまり、「面接場面の緊張」はうまく話せないことを意味しており、このことは自己の能力に対する不信感を導くと言えよう。自己の能力に対する不信感は、周囲の友人と自己を比較し劣等感を生んだり、別の場面における自己アピールを自信をもってできないという行動を生み出していると考えられる。さらには、この「周囲からの影響や準備の困難さ」が次回の就職活動における「面接場面の緊張」を生みだしていると考えられる。

本研究では、「面接場面での緊張」と「周囲からの影響や準備の困難さ」が対比構造をとると分析結果では示されたが、この背後には「面接場面の緊張が失敗体験を生じさせ、次の機会に対する準備に不安を感じる」という循環的構造も存在する可能性がある。発展的考察であるが、この循環的構造が短期療法で言うところの「行動の悪循環」に類似していると考えると、緊張した面接の後には必ず就職行動に関係ない行動を挟むなどの「悪循環を断ち切る」アプローチも有効であるのではないかと考える。

### 5.2 「つまずき」となる出来事に接した際の感じや考えについて

本項目では、「周囲の観察によるネガティブな感覚」と「自己内部から生じるポジティブな感覚」という構造と、「まわりや自分自身から生じる不安や奮起」と「失敗体験から生じる撤退」という構造である2つの対比構造が導かれた。

前者については、「周囲の観察によるネガティブな感覚」に「BL2-2まわりの様子を見て、決まらなかったらという不安や焦り」というカテゴリが含まれているため、将来展望への不安とも考えられよう。また、「自己内部から生じるポジティブな感覚」は松本(2012)が示した、就活の失敗について、現状に対して自身で何ができるかという視点に立った自己修正がなされた

たと考えられる。ここに、つまずきを感じた際に、将来に目を向けすぎることの危険性が存在するものと考えられる。

後者については、「不安や奮起」という失敗経験の少ない学生が感じるであろう自然な感覚と、就職活動自体のやる気をなくす「撤退」という、就職活動を続ける動機付けの相違が対比されていると考えられる。ではこのような動機付けの相違がいかなるところから生じてくるのかは、その学生が体験した「つまずき」に関する出来事やパーソナリティなどを検討しながら判断していくことが必要であると考えられる。

### 5.3 希望する支援について

学生が就職活動に関して希望する支援については、第1軸・第3軸の解釈より、「学生個人への要望」対「組織への要望」「仲間・支援者への要望」、第2軸より「指導のリクエスト」対「精神的ケア・人的資源のリクエスト」、第4軸より「学生自身の精神的安定」対「情報提供」がそれぞれ導かれている。

「学生個人への要望」対「組織への要望」「仲間・支援者への要望」については、「学生個人への要望」が就職活動に対する技術指導を求めているのに対し、「組織および仲間・支援者への要望」が、精神的なケアと就職指導を行うキャリア支援課に厳格かつ長時間の指導助言、を求めていることが特徴的である。言い換えると、技術的指導のほかに、共感的役割的・指導的役割的な対応の要望があげられている。これらを一人の教職員が行うのは多重役割という観点から難しいと考えられるため、各現場に応じた役割分担が効果的な対応を生むのではないかと考察する。

「指導のリクエスト」対「精神的ケア・人的資源のリクエスト」については、前者は具体的な就職活動に関する技術指導や厳しい指導助言を示し、後者は共感的な対応をとれる人員の希望を示しているといえよう。水野・佐藤(2012)は、就職活動では情緒的なサポートよりもどのように就職活動を進めていけば良いのかといった情報や実際に面接の練習をしてもらおうといったサポートがより利用されやすいのかもしれない、と述べている。本研究のデザインは質的なものであるため、指導助言と共感的対応のどちらがより求められているかは検討に至らなかったが、前節でつまずきから生ずる感情として、就職活動から目を背けたいという撤退が示されたことより、共感的対応も必要であると

考える。両者のバランス取りが支援する側に求められていると考える。

「学生自身の精神的安定」対「情報提供」については、「学生自身の精神的安定」では、学生自身が精神的安定を求めている不安定な状態を示唆していると考えられる。また「情報提供」については、より効果的な就職活動を求めて、多くの情報を求めている姿勢を示しているが、前節のつまずきから生ずる感情として周囲の観察から生じる将来像への不安も導かれていることより、多くの情報を得ることは不安感も導く恐れもある。したがって、「精神的安定」と「情報提供」は、精神的安定を求める状況から多くの情報を求めさらなる不安という循環も仮定できる。情報を提供する側は、提供される学生本人がその情報により更なる不安をかきたてられるか否か配慮することが必要だと考える。

## 6. まとめと本研究の限界

本分析では、つまずきのきっかけとなる出来事について、「面接場面での緊張」と「周囲からの影響や準備の困難さ」の対比とその循環関係、出来事から生ずる感情について、将来に目を向けすぎることの危険性および「不安や喚起」と「撤退」という異なるレベルの動機づけの問題が明らかになった。さらに、希望する支援について、指導的・共感的役割、情報の希求と不安増大という循環が指摘された。これらは、学生の就職活動経験から導かれる一応の結果であるが、前節でふれたように学生側の要因であるパーソナリティ要因については検討に至らなかった。この点が本研究の限界であると同時に今後の課題であると考えられる。

## 謝辞

本研究は、2013年度札幌学院大学研究促進奨励金 C (SGU-CG13-204006-01) (共同研究者：葛西俊治・河西邦人) を受けて行ったものである。

## 参考文献

- [1] 軽部雄輝・田中佑樹・川崎由貴・村田美樹・永作稔・嶋田洋徳 (2018). 大学生の就職活動の遂行に影響を与える不安の機能的側面に関する検討, 早稲田大学臨床心理学研究, 18(1), 19-27.
- [2] 葛西俊治 (2008). 関連性評定質的分析による逐語録研究—その基本的な考え方と分析の実際—, 札幌学院大学人文学会紀要, 83, 61-100.
- [3] 政本香 (2011). 想定された就職面接場面の不合格場面に関する反実仮想, 松山東雲女子大学人文学部紀要, 19, 45-54.
- [4] 増淵裕子 (2019). 大学生における就職活動を通しての成長に関する研究の動向, 学苑・人間社会学部紀要, 940, 55-61.
- [5] 松田侑子 (2014). 4ヶ月間の就職活動による類型化と関連要因の縦断的検討—就職活動不安, Big Five, ストレスコーピングの観点から—, キャリア教育研究, 33, 11-20.
- [6] 松本芳之 (2012). 就職活動における失敗への対応, 早稲田大学教育・総合科学学術院, 学術研究：人文科学・社会科学編, 60, 105-119.
- [7] 水野雅之・佐藤純 (2012). 就職活動中のサポート資源に関する探索的検討, 筑波大学発達臨床心理学研究, 23, 29-35.
- [8] 尾上恵子 (2010). 短大生の就職活動に及ぼす影響不安, 期待, 原因帰属の側面から, 修文大学短期大学部紀要, 49, 21-28.
- [9] 上田紋佳・猪原敬介 (2017). 体験の回避が就職活動不安と就職活動の関係に及ぼす影響, ルーテル学院研究紀要, 51, 41-51.
- [10] 王晋民・黄勇 (2011). 就職不安と情動知能, 就業動機との関連性, 千葉科学大学紀要, 4, 37-44.

## The Analysis of the University Student's Difficulties for Their Job Hunting I

Tomoyasu SANO<sup>1</sup>

### Abstract

We focused the student's difficulties for their job hunting. If we find the difficulties and their needs for support, there are two meanings of educational factor and prophylactic clinical activity in university. So, we aimed that we validate the psychological process in the student's difficulties for their job hunting and their needs for support.

On this study, the subjects were 27 students in bachelor course. We recruited the students who are hunting for their job or finished hunt their job through portal system or bulletin board. We performed a semi-structured interview for the applied subjects.

Result of qualitative analysis, it reveals that the beginning of difficulties are the contrast and circulation for "tension at the interview" and "effects of ambient and difficulty of preparation". About the feeling from the difficult events, there are the risk to overlook to the future and problems from motivation in different levels of "anxiety and evocation" and "withdrawal". And then, about desired support, there are circulation between the "guidance and advice" and "empathetic support" or "desire of information" and "increasing anxiety."

**Keywords:** University Students, Difficulties for Their Job Hunting.

---

<sup>1</sup>Department of Psychology, Sapporo Gakuin University.